《書評・新刊紹介》

甚野尚志編
『疫病・終末・再生――中近世キリスト教世界に学ぶ――』

川崎　紘子

本書は、早稲田大学総合研究機構のプロジェクト研究所「ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所」が 2020 年夏から 2021 年春にかけて「ヨーロッパ中近世の『疫病・終末・再生』」をテーマとして行った共同研究の成果の論文集である。この共同研究は新型コロナウイルス感染症の流行により提起された、現在の歴史学に対する問題意識に基づいている。その一つはグローバルヒストリーの潮流に逆行するような各国内での分断、もう一つはこれまでの歴史学における疫病や災害の軽視である。こうした問題意識にもとづいて、主に中近世ヨーロッパを対象とする 15 編の論文が収録されている。

「序」では編者により上述の問題意識が示される。第 1 部「終末に向き合う」では、疫病などの危機がもたらした終末思想について扱う。甚野尚志「カール大帝は『終末の皇帝』か？――西暦 800 年と終末意識」では、カールの 800 年の戴冠が終末を意識したものであったと主張する。当時西欧で流布した西暦 800 年頃が終末に当たるとする創世紀元や予言の書、また異端の出現や、飢饉、疫病、自然災害の発生がその背景にあった。

岸田菜摘「6-8 世紀の歴史叙述における疫病と『神の怒り』」は、6-8 世紀に東地中海で流行を繰り返した「ユスティニアヌスの疫病」が、疫病は神の怒りという説明によって、イコノクラスムなど皇帝の政策に利用されたと論じる。

毛塚実江子「再生への希望を求めて――サン・スヴェール黙示録写本挿絵の『災い』描写から」は、他の写本に例のない、災いを前にした人々が驚き逃げ惑う描写に注目し、終末を前にした人々の救いへの願いを読み取る。

白川太郎「預言者に従う人々――13-14 世紀転換期エミーリャ地方における終末待望とアポストリの変容」は、終末待望的「異端」の代表とされるアポストリを例に、中世後期イタリア半島での「異端」運動における、終末待望の霊性・教義の重要性に疑義を呈する。

第 2 部「疫病とその影響」は、14 世紀にヨーロッパで流行したペストについて扱う。高橋謙公「14 世紀、黒死病とともに生きること――港から描くシチリア島王国の政治・社会・経済」は、疫病で失われなかったものへの注目を促す。黒死病が流行した時期のシチリアでは従来の見解に反して、港湾における交易活動は継続しているという。

大塚将太郎「疫病が 14 世紀半ばの教皇の葬儀に与えた影響――教皇クレメンス 6 世の葬儀(1352 年)を事例に」では、教皇の葬儀に関する典礼書から式次第の変化を検討し、葬儀への疫病の影響は大きくないと結論づける。

渡邉裕一「中世後期アウクスブルクにおける『大量死』――ペスト被害の通時的考察」は、14 世紀後半から 15 世紀前半のペスト流行について、都市年代記を検討する。宗教的な反応もあるが、行政の人員不足解消や共同墓穴の設置など、繰り返す疫病と大量死に対

して現実的対応策が出されていた。

皆川卓「アロイジオ・ゴンザーガの『殉教』と聖化―対抗宗教改革下『帝国イタリア』における聖性の形成」は、疫病患者に奉仕した人間への聖性付与を論じる。ここで扱われるイエズス会士アロイジオ・ゴンザーガの場合、ゴンザーガ一族内の抗争という政治的理由から列福が早まった事情も指摘している。

第 3 部「『他者』への抑圧」は、危機に際して社会から排斥された「内なる他者」の問題を扱う。黒田祐我「病と毒と異教徒――『他者』の排斥をめぐるラテン・キリスト教世界と中世イベリア半島」は、ユダヤ人とムスリムへの「毒を盛る者」というイメージを取り上げるが、毒は疫病にも結びつけられるものであった。竹田千穂「フロワサールと中世の『癩』」では、中世において不治の病であるとともに社会的な排斥をも招く「癩」のイメージを示している。高津秀之「なぜ狼男は人を喰うようになったのか?―近世ヨーロッパにおける狼男イメージの変容とその背景」では宗教戦争の続く危機の時代を反映し、狼男に限らず他者に対して人食いのレッテルが貼られたと指摘する。

齋藤敬之「『神の怒り』を招く瀆神の法的処理と社会的文脈――16-17 世紀ザクセン選帝侯領を例に」では、瀆神に対する公権力による規制を扱う。その根拠は瀆神的な言辞が神の怒りを招き、災いをもたらすという考えにあった。

第 4 部「『境界』を乗り越える」ではまず、隔離の問題が扱われる。林賢治「二重修道院における身体的隔離と霊的共住」によれば、11 世紀中期、女性の信仰集団を修道院の管理下に置くため、修道士と修道女が互いに隔離しつつ共住する二重修道院が南ドイツで出現した。両者の仲介を担う俗人兄弟も含めた、三者の共住を考えるという課題も示されている。

続く 2 編の論文、三浦清美「溶解する『死と生の境界』と国をめぐる歴史認識の変容――『ヴォロコラムスク聖者列伝』の幻視」と武田和久「罹患先住民女性の臨死体験と対称性――スペイン領南米ラプラタ地域のイエズス会布教区を事例として」は、いずれも蘇る死者の物語を取り上げる。前者には 16 世紀ロシアの疫病と陰謀の時代を生き抜く意志が見られ、後者では宣教戦略として天国と地獄の対称性が強調される。

以上の内容の紹介からも分かる通り、本書を構成する論文のテーマは疫病そのものに限らず、疫病流行などの危機と関連する終末観の形成や他者の排斥、隔離、死生観など多岐に渡っている。その中でもしばしば取り上げられるのが、疫病は神の怒りという捉え方である。しかし神にすがり、怒りの原因を取り除こうとするだけでなく、この捉え方を政治・宗教政策に利用しようとする反応もあったことが分かる。人類の歴史は疫病により脅かされてきたかもしれないが、疫病とともに進んできたとも言えるかもしれない。疫病を歴史的な視点から考える際に、被害や対策といった直接の影響に留まらない広い視野を、本書を通じて持つことができるのではないだろうか。

（菊版　15＋364 頁　2021 年 10 月　知泉書館　税別 6000 円）（京都大学大学院修士課程）